





ちあはう
新居はゆサム所
あお松、高き人也虎人お高遠
妙手の多處あくま坐、かくべつよ
活や手文山をす中、もひとて
事と事と其一のるアシテ、もひとて
治事事と之のる、松手此ノ人、是
而山是之哉ニ寒之唐成室、九百
新居はゆサム所

聖
經



冬や重き間代わるゝとて落穂乃草木を良田みぢき
折柳を駒寄處に遍あれども何うて御詔乃
れとへ候をよかとさる里をほんとうすれ
せうりん車は故園子誠のものかと御く候
浦ノ村乃浦ト越をやまめ故人極路と頭をまぐ
風盤帳をまぐり一喜秋波入おこうと自己平
賀乃み又飛ちぬ今や武の深川は吸露巣を
まぐく神の鼓也の稚神と曰はれ浦岸子をも
クれ帝をもくはるく其行物をえられた路子城
志もあきを氣渡天竺修の報子がえまく西雲寺
山のあら風を拂ひまくさすく附向ひまく
峰すかはせむれを似てや相もとてきくあひてく
鳥は鳥門はは難もがりあじに先せま乃良ふと
れとひそくとよらへりてアーラーとつふるハ努
山田から剣鉢などと考究を以て採りて一あじと
原と彼の立場と方正達を結び緋の梅を修
角合せんとも持集すもそくをもつて路子う風流の城
等うはあはれの句マハ如俗語の方ナリあはれとす

雅々佩青を先にとひ船あよびまを留めとやいえ
す物傳子う縫ひ南鎌了極へく路、御馬と鳴まの
の毛東寧曾越乃すう走せく千里松原を北風
千度まもむも傳子ア支路、高松伯玉引ひて、彼
はゆゆかんに腰うて是ふ説せんす、彼思ひさうめ
やへ帝又路す、野琴は友う、み交情、事にかくす
す、彼飛了托まれよ生涯、一橋以重
むち一たわよお詫び、一派がき、御難事みどり
車、れどもト、也、むかし、わがれに其一行と奉て、集
ちく、ゆう

南勢船く病へ楚櫻

東比致詩稿

吸露菴先生詩稿

麥舟
雲郎校合

九一字詩よお遠波三句乃死活乃の變化あれまく
松人の説も耳みあくお獨特詩の論も夢々今之
贊それりハ及ハに至と南仙山一北山子極也トモ一すれ
モお遠波よ感せりめし其一條をあくアリ奉一筆

丁觸紙鳥とかくよ吹上

楚莊

南伐よりと都へ着ちかく

封ト

酒。が夕房平河。まく。居ゆ。

梅路

彼の善い。ゆく。ゆよかえ。れ。か人の。さゆ。と。え。は。て
群。う。そ。が。の。一。字。神。妙。也。と。一。生。譲。乾。平。乃。ひ。よ。封。ト
か。ア。ソ。ア。ソ。梅。路。ゆ。ゆ。路。子。己。や。句。あ。聖。と。つ。と。
秋。白。酒。里。ふ。お。う。し。れ。許。あ。り。ち。封。ひ。と
南。き。そ。善。い。お。み。龍。ち。笠。い。う。き
ア。ア。ソ。ア。ソ。酒。ゆ。り。わ。し。と。よ。路。是。城。す。く。仰。る
ア。ア。ソ。ア。ソ。酒。ゆ。り。と。こ。ー。路。り。う。の。主。御。た。ト
ア。ア。ソ。ア。ソ。酒。ゆ。り。と。こ。ー。路。り。う。の。主。御。た。ト

沼ハサ房アリキニモニ

トムニシテ海里アヒナシ候マサニ

傳評ノ曰是修メの一字アリテモ萬句十字乃

寺ニシテ海里アリテ寺ニシテ寺ニシテ

高坂廊アリシテ幕モ幕モ

かね人さくハ畫土竹牆アリ候アリシテ
高坂幕モほふ者ニ画テレ辟無事候人ちれ
沼ア房アリ仰きて居りシガのやすトシテ入
入キシテ

高坂幕モ高坂幕也

トハシテ人シテ高坂幕也アリセ乃シテソシテ

ア房アリシテ幕者ニ高坂幕也通アシテ
シテシテ人シテア房アリシテ沼の名ニシテ

あきて

沼ハサ房アリキニモニ

トハシテ人シテ高坂幕也アリセ乃シテソシテ

神妙物アリスル

九初字は向也トカナカナシモカナヒキモ

うづのあまくさ
またくい詠向歌を傳ひ
もう一句か乃アトキタ
却く之黨の源を至る

波音はうちあくか室乃音

和桂

國々の才人をもつて、其の才を發揮する所である。

梅路

宮様辱めれん人あたゞよわれのとあまくき性の
直すれ麻のうそまわは
辛ちうき人やり
ゆく風雅をゆくし、彼のさばくきうちは早
あらゆが人ゆくも奇ひれどもむく感

ちゆくとちゆく、すくん或ひ、已セテ字が變へぢく、
あてたまはえきりひとくわくかへ、けあた錦あく乃
附句とすこ、密教のにたまん人海アむじて、
語も極詮ばくは奇妙の博もあ繁あくハ錦未此
句體ア、まづまづ、さるもあれと

同上あかひのれさうる友も生れしむる

諸神より入る者多矣人たゞ我心と云ふ所が
あらむと禱りとて一句もかへば心の通ひあら
前句後句けまわる事もあらず一句もかへば事も

追手のとひのあわせひをりまくすく毎にふニの
あくせんちーものあれ

傳説三四枚たりて書えは句物を彼の右よりれ
板の絵をかひをやめらへる後は板の絵を修まゆ
はうもお氣とむれりとねたけ失く一句失
くもをほを変よ句作ともすもばちゆのし

石垣が太角や筋まつひありセ 江戸

お代乃ササモモキラ考 頭 二峯

にまはうはすく施答ふむひ蟲の毒にけりと又ま

ゆ。宗直はまく一句あれをよがく極りの筆急
ヨリも急きとあはく。自へやスとねく板の絵
ひもきれよあひもお紙乃物をせんあひまく
くあひも縁やあまく中に

お代名中平 真清考頭

物くもくかんこくもくへもくもくする

何すら入めくひや。新法以

入ぬうの佛形でもすもあひ

格路げこうを譯へて曰うまじげふの者たゞくは

さきとす附のゆゑにたまを手に持て意大旨
乃附てつるをせうき車たやくらせんと立世の板
とおはゆく述句はかまひても仕りく家情をうの者ふ
あえまを是れも又乃あく

三足猿
直音直串

かづこの恋乃歌 章 韵

季覧

かたちねり候もくらひをまほ月
小翁乃恋は枝子れむ 反朱
小翁乃恋は枝子れむとまくは枝子れむ波
通りくちはれ情半邊もやうりよ波

さうゆの恋れども又人上にあ
ちがうと附の軒轅とをしより
およのくとくにとがくされゆきとあ
きみはゆはゆあうるくのりけ放ふ葉ふえ
乞鳴いふ沈漏くとくとく番頭のとくく波うけは
入にうけらる人乃だくのれをひむ代者仰のとばに
のとばくあは用うそを遣ふもとてわがを替
寄せる端かあく

唯尺のさうの一匁おとすの恋の事頃乃体ふまく

やうと一叶比仰るを望む じめにかひし
ときはりきくとみゆうすはれゆふもくへ 唯えま
ゆゑ乃あおもめ わくわくとひのせくとも

くねうすがまわり眼鏡ともいふ

梅路

備説 口是ア眼鏡の人である。又云
京の物をひ、京乃秦陽の酒ともいふ
あるを一句も奇能かもしく

尼 ち え み 乃 匂 ひ す く う か

挾之雀

彦少室奥乃御山の處

梅路

或人は筆が寧ろももんと呂わぬへかと能あらずか
ひちづれりやまくよのゆゑ又嫁アライ中よりみゆふ
ちくゑあわすもむれ句也とねらへきの絶唱
ともちくゑ首ゆきものち人乃誦誦わきく是う
かきくとひせれ中よ路シナヒに一句よやく誦誦
一字のめゑわざくとおきよび彼のへ乃ずく御
其をもとまくさのじの句ともおあえじよ

傳評へ曰一字詩譯へ呂かへ乃かへ墨のへす
かあまんとも是何んをうづく

幕乃筆をたゞの歌をす

布青

えふへあきへとねうは

馬を教ぬのせり

葵生

奏はすすきのせり

梅路

鈴を附くおたるふぢくさく

詠苦

示来

梅路

傳評へ曰お弓の前句をうづくま馬士へ

大事能す。ほく城高きうちといへ。筑方にゆき
こちや年うれ日の傳とよめとゆきあへん
りてお猿を馬うゑりふ乃翁室けちも
えきむ

は句なる。お猿を馬うゑりふ乃翁室けちも
てお猿を馬うゑりふ乃翁室けちも
あつれお馬の前うきりすにをも
重あらむひまくにうぢくへすにをも
特あらんや

晴々すすきけれ松把のよ

母た

まあくすり縄ハモ粥

楚之雀

かゑ前向は縄を押すに情う乃とあを薙へ

皇詔もわらひはすをめぬ

ち轉くみか一派乃詔也とおあすとてひぐく

あちやくくちゆくはきあんぬさうひすら梅路の

糸を縄ハキを絆まび情う乃あそふ草へ入と

うううううううううううううううううううう

大快鹿城

おれ縁す渭聲を結ねう

寺あきくうに縄ハアも

向うすりはもりき大年をつぬれ

梅路

帝詩三四言實有功

着きくあひあ戸の往来

山叩

ひねり以旅仕日も瘦く否

玄窟

体詩三四言一例詩一體の字次ぎ多

くうさむ一三の事物を用ひてたゞとも

二階乃書事三事とぞれ

公幕

特義
集章

月既ちヨリなきて夜を用ひるがすはあく
草木の音

返若も御うそく足跡なり乃ミ 玄宿

枯葉を折くれば冬生、垣

抗引く来て霜を月に落すれ 梅路

會所へより奉まよて施設御事わむる
ハの字紙のう

傳評の白ハの字あらひ難うに似るのすぢら

ふくよりふ原

あの邊もまだアホモモ二七年

布流

これらハナノ義事略

射堂

傳評とけ志怪本物のうち

梅路

傳評とけのたぬきとあともほか一毛一毫

一毫

の風

支那歌を寺ガルのやく全けゆかうそんを望
一句詠之をよしとす不通の人云々謡一毛

あちうきよとと國事にあら、免風

畫々の物をもたふりや

把笛

錦ぬ乃はまくらを取れや

梅路

傳説へ口をちまうんみき半里の處をまく

碧玉とひろはわゆえぬ

風折

玉艸とてらあや草原乃度くと

楚雀

仙ゆくまも様くと比

梅路

我せし神の鼓おもて一時もけうれむをば後ち

多乃かとよ茶句ひまくに

竹鳥みきを簫くと比

梅路

がく鳥くつえをくねい歌づれをや今鳴りてひと
とひ強くとおれどもひなき一トリくとおれど
まくとおれどもひは筆をく乃詠うとあけれ
あ句が畢竟をあやむある

傳説へ口金樂乃詠うとあやは初夜の
をほくねの附白ハ同也あく

毛前句ア烹の言葉詠用ひゆく句中に夷りを
一とあくと詠白は作もとあ辭をれども之を歌やま

とある所へ上るのも
はまとの事にて
まちう説ふるけられ故門流乃ちもとあへひ已

芭蕉
小丈廩之中

批評し
ち依依本然と

史邦生寫中華民族之歌

是ひちもく き封句あへぬまゝ 扱ひとあり

蒙古文

足りぬむかしよのとあき日暮

小學古今考略

うつむきの多きの子供、或う男

御手向印

向
居
寓
不
長

古之以人之
志氣不凡故
惟能節

一
切
も
あ
ふ
く
れ
た
む
ゆ
き
を
か
う

きくみそく絶えの極をても

あはれ乃より多くにあれ

カシマリモウヒノカツカツ

御説へ曰く頃々の上やわゆる
事は、おほきうなづかし
なり。ひ實体を假り
て爲めにあらまこと

あうきよかわらへ一せりとむらんて
五箇

卷之三

卷八

御子おれやくめの邊に
立

仰詠の向を俗中の平話ぢりまへむわよ。

卷之三

卷之三

今、ぬ袖もとも 扇、猫とも、友よ理屈のわみちづか

は句風流乃ものよきもあ

教を尊びて信をもつて乃是の説を重ん

少室山記
卷之三

卷之三

及かねまくへ追ふ

蒙古文書
後
思

路

机山

下冷ちやき擇丁乃傍
燒鶴と格子す日放新

病もいぬしやれ殺生

望の子くみを曲窓にまもる

店へあちむ徳を冷

素毛

サ房に牛は孕いひりす

一眼の強さで乃書形を

うきさい而て立候夕日放

正以

頃りをひかのつわうし

一宿

封ト

路

花す多袖も比翼鳥乃かぬ鶴とも

身のえれ日放銀平 双六

宣考

転き多雪向北よもひづけ

湖のせく併達乃彭坊

封ト

詫吉了望理をやも立すきや

あ望れ中にれう一并達

山叩

路

衣張ふか内倅松乃植木あ里

あ生くちよぢゆふかさく

示來

本後のめどもの葉持くき

路

声をきき也降

甫尹

瓦右城か塚へ牛うけまくり

和卒

瓦をもとひを千里度

路

仙るに葉は風まくも匂ひあひ

和植

の塵埃を九重乃に

楚雀

りす房の國をあきれ子供持て

路

相殺少針もあく縮たま

危承

女房は窓に髪ゆふ五朝乃日

梅吉

役者の岩も益をうべきれ

路

あれ時ひ葉碗八蓋不小さうにま

五升

クふ葉葉耀ふ口舌一にて之れ

如卒

引裂た多よ歎ううむ名づけ

路

小舟の烟ううれ結輪

急崩

夕日も行是山城たれまう

升詰

むるうれ花をもみまう

素升

ほを極せ乃敵帳のよけひ

市声

外辨のまくさうやうれまく

路

会ひ當き菊むし影里

希因

おほんと城かうて又まも足足者

芦丸

笛く鳥く多休せ44刈

路

給す筆と雀子傳を

芝雀

サヤモトトヨシ風暴か風人

示來

春秋友に冬ふ紙衣とすすき

路

陽き旅鳥せ唐ひはまの
く人音も人子音もとれちて

山口

夕涼く春却う草く春れ

路

信す多持木計打乃猪く多

野相

於を抱すむ免れ田今

希因

ち詠馬ハ絶るよけすものいへる

路

川と叶ゆとすく汝毛

宣考

雪月和牛船でつる軍事

路

錦旗毛豆根すあき乃づ通り

豆箕

やくあはせてもくも車もあざれ

南尹

あちくあぬちく医者を止めく

路

老是老是老はがくお御ちや

和
本

形も絶対に ほんの 用 あつま
ゆきよめどもれぞとよ

路

おそれぬ固扇のゆぢりあり

卷之六

草文比上てかまき乃よのかまき

路

火の光を以て、夜は、

卷之三

今一
種もく
ぬたみ

三

かまくらの
船も
かまくらの

市声

旅
宿
年
月
日
年
月
日

路

神系ノ額モシテ也

宜

涼山時少卿
移守了加

路

家事よりちよとまくらぬを齋書
康あらわ山をおり月報
親事よりまくらぬを齋書

卷之三

穢とくめく是れ道帆

能くすれす一例。唐の謡謡

行うれよに下りお集会

伽羅の喜は喜きや袖ふくらへん

障子鳴きた振先了川

杜ト市声

吉生は向ひ京へ下りまし

よのよのよも恋を起

陽子の支障の中を通ち

楚雀立下

うのうのう人志被され

鳥帽子はわよまとけを喜び

あむけいはと太本乃下せゆ

買天國了汲んとあれま

すいふふ流しあい事は福かまは

頬と一交平是れ銀ゆく

障子も右故の所れか一月

今終章雨てとぞなる新搖

暖簾乃すめぬ人や門ちえ

芦と萩とは併納此譜記

吉井

あく人乃事多事多日也月

芦丸

高ちえりありもゆケテナリ

二峰路

立派よきもあくく 明ワト

和卒

うすをきは中にさわま

豆箕

うめむけす舟の健ミテミ者

杜樂

圓妙裡勝アラマテヨモ

路

飯け乃詰合みのちしき合ふ

路

高きくアレトニ年ヲ又萬

路

波瀬のつひてふ聲す波瀬す

三刺

に湖へゑよしたのむか坂

素行

瑞吉みハ佛乃落此歌スう望

路

多忙花る多忙山巣花

大睡

神多日す彦神ヘ月

封ト

自サの聲ハ切了及ハ照

宝曆八戊寅穢九月 秋光菴藏板

江戸通油町

湊原屋太兵衛

書肆

京二条寺町西六入

井筒屋庄兵衛

七
和
九
八



